

---

# 絆

西本直希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絆

### 【Nコード】

N3401Z

### 【作者名】

西本直希

### 【あらすじ】

GREEのコミュニティで行われているコンテスト用原稿です。

短編

1 (前書き)

未完成

友達が、居なくなることになった。  
冬休みの前日だった。

「今まで黙っていましたでしたが、私は転校することになりました。父が、転勤をするからです」

友達の、長瀬朱里ながせあかりが一語一語を確かめるように話しだした。  
ホームルームが始まると同時、朱里が教室の前に立つと騒がしくなっていたクラスメイトは、今はもう静まりかえっている。

「二年間お世話になりました。高校は違いますが、大学はこの近くのを受けるつもりですので、会うことがあればよろしくお願いします」

意志のこもった目は赤く、口の端は震えている。

最初は頭に霞がかかっているみたいに思えて、なにを言っているのかわからなかった。でも、頭はだんだんクリアになっていく。そして、

朱里の転校はずっと前から決まっていたのではないか。ふいに浮かんだ考えに頭が真っ白になっていった。

僕と朱里は長い付き合いだ。お互いに強い絆で結ばれていると思っていたし、何かがあれば真っ先に言い合えると、思っていた。

なのに、僕は朱里の悩みに気がつけなかったし、朱里は僕に何も相談してくれなかった。

その事実がやけに重く、僕にのしかかってくる。

「あー、その。突然のことで皆戸惑っているだろうが、これは事実だ。長瀬に皆と最後までいつも通りに過ごしたいと言われてな。黙っていたんだ」

ばつの悪い顔で担任の橋本先生は言う。

それに合わせて教室がどよめいた。

「えー!」「うそ、何も用意していないのに……」「でも、それは仕方ないよね」「てか、これからどうする? 何もしないのも味気ないじゃん」「まあ、確かにね」「放課後皆で色紙書いたり、お別れ会しようよ!」「お、いいじゃん! ナイスアイデア」「てか、まだ朱里の予定聞いてないじゃん。皆先走りすぎ!」「てか、メルアドレス交換しない?」「なあ、……」

「あー、お前ら! 少しは静かにしろ」

どよめきが収まる気配がないことを察した先生が声を張り上げる。しかし、もう手遅れだと分かっていたのでだろう。

先生は嘆息を一つつくと、

「たく、この時間を長瀬とのお別れ会にするから。自由にしてもいいが、他のクラスに配慮すること! 以上」

とだけ言って教室の端に移動した。生徒の意思を可能な限り尊重してくれることで有名な、橋本先生らしい。

そして、教室の前にいる朱里の元にクラスの皆が殺到した。

まずは男子生徒。

友達である僕から見ても、朱里は可愛らしいし、実際かなり人気がある。しかし、男友達といえは僕ぐらいだし、浮いた話は一つもないときた。最後に仲良くなりたいたいという思いもあるのだろうか? 彼らの動きは速かった。そして、そんな男子を押しつけるように女子生徒が朱里の元へ駆ける。

いろんな人に囲まれて、朱里はテレ笑いを浮かべながら、もう、いつもの様だった。

ごちゃごちゃとした事を考えていた僕は完全に出遅れてしまった。言いたい事はたくさんある。でも、口は痙攣するだけで言葉は出てこないし、足も動かない。朱里の周りにいる彼らを押しつける気が湧いてこない。

ただ、立ち尽くすだけしか出来なかった。

そして、

「すみません、少し気分が悪いのでトイレに行ってきます。」

そう、先生に小声で呟き、出来るだけ音を立てないようにしながら教室のドアを開ける。

教室を出る直前に朱里の方を見ると、悲しげな目でこっちを見ていた、気がした。

頭を振ってトイレまで走る。

「逃げてしまった」という後悔。朱里の転校という突然の事実。

トイレの個室に入ったことで、一人つきりになれたが、二つの事が一気に僕に襲いかかってきて、胸が苦しくなる。

泣きそうだった。何かを吐き出したかった。

でも、泣けもしなければ、何も出来やしなかった。

2 (前書き)

未完成

「おーい」

不意に個室の扉がノックされた。橋本先生の声がする。

「どうしたんですか？」

「ほら、お別れ会だけどさ、購買に移って皆で何か食べようってことになったんだ。奢ってやるから来いよ」

言われて、カギの部分に手をかける。

でも、足も手も動かなかった。

そして、気がついた。たぶん、僕は、今さらお別れ会の中に入るのもなんだか怖いんだ。

子供みたいに、出ることを躊躇する。

すると、また先生の声が聞こえた。

「なあ、友達がいなくなるってのは悲しいよな」

何を突然、言い出すんだ……。困惑したが、

「ええ」

頷いた。

「悲しいってことはさ、そんなけその友達の事が好きだってことだ」  
そこで、先生は言葉を区切る。そして、言った。

「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3401z/>

---

絆

2011年12月11日18時57分発行